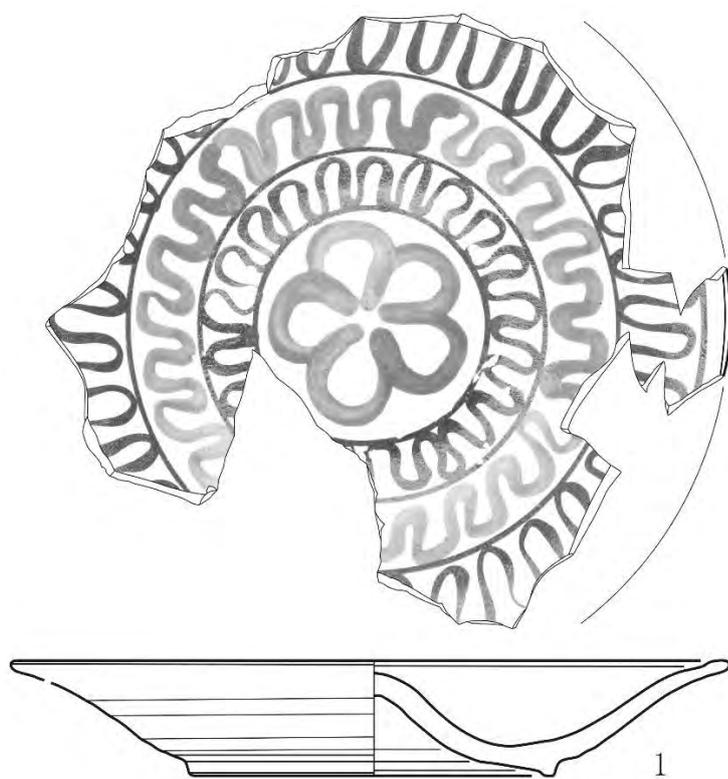


種別	有形文化財(考古資料)
名称	若林城跡出土織部皿
員数	1点
時代	江戸時代初期(17世紀前半)
所在地	仙台市宮城野区高砂2-22-1(向田文化財整理収蔵室)
所有者(占有者)	仙台市
性質・形状 大きさ 重量・構造	法量 口径20.9cm、底径10.6cm、器高3.3cm 特徴 底部中央がドーム状に盛り上がり、体部が外反気味になだらかに立ち上がる。口縁部がやや開くため皿とされている。文様は底部中央に花卉状の文様が描かれ、底部から口縁部にかけて黒褐色の圏線が四重に巡り、圏線の間には黒褐色と赤褐色の波状文が鉄釉と赤楽で描かれている。
現状	仙台市教育委員会が保管
由来・証拠・伝説 又は作者と伝来	本資料は若林城跡第11次発掘調査(平成22年(2010))で出土した遺物である。若林城は寛永5年(1628)に伊達政宗によって仙台市若林区古城に築かれた平城である。若林城の完成後、政宗は仙台城から若林城に移り日常を過ごした。寛永13年(1636)に政宗が死去すると若林城は廃城となり、御殿建物の一部は仙台城二の丸に移築され、城内は藩の御薬園となった後、明治12年(1879)から宮城刑務所となっている。発掘調査では、城の西側にあった表御殿の建物跡や城内を流れていた六郷堀、廃棄土坑などが見つかっており、本資料は、若林城跡第11次発掘調査で確認された廃棄土坑(SX14)の3層(遺物廃棄層)から出土した。
説明	本資料は若林城跡の発掘調査で出土した織部皿であり、出土状況や共伴遺物から若林城の存続時期である17世紀前半のものと考えられる。 本資料は底部中央がドーム状に盛り上がる他に例を見ない器形であり、その製作技法に「弥七田織部」の特徴がみられることから、弥七田古窯で生産されたものと評価されている(長瀬・高橋2025)。織部焼は主に17世紀初頭から美濃地方で生産されており、茶陶や懐石具を主体とし、全国に流通していた。中でも美濃国の弥七田古窯(現 岐阜県可児市)では、織部製品を焼いた他の古窯とは一線を画す独特で特徴ある良質な製品が焼成されており、弥七田古窯産の製品は「弥七田織部」と呼ばれた。本資料と同形状の「弥七田織部」は極少数しか出土しておらず、若林城跡を除くと弥七田古窯跡と三春城下・近世追手門前通遺跡群B地点(福島県三春町)のみであるなど貴重な資料である。 また、『貞山公治家記録』に記述のある茶会や能を催した「西曲輪」は若林城の一角にあったと考えられており、若林城が饗応の場としても機能していたこと、賓客をもてなす際は出土した織部焼など高価な品を使っていたことが推測される。 以上のことから、本資料は若林城跡の性格を考える上で欠かすことが出来ない重要な資料であるとともに政宗の趣味嗜好が垣間見える遺物として価値が高い。
備考	【参考文献】 仙台市教育委員会2010『若林城跡―第8次・9次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第377集 仙台市教育委員会2011『若林城跡―第11次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第383集 長瀬治義・高橋純平2025「1. 若林城跡出土「織部皿」」『仙台市文化財調査報告書第528集 文化財年報46 令和6年度』pp21-27 仙台市史編さん委員会2001『仙台市史 通史編3 近世1』

若林城跡出土織部皿



写真



実測図

若林城跡出土遺物目錄

No.	登録番号	調査次数	種別	器種	産地	遺構名	層位	写真No.	年代
1	I24	11次	陶器	皿	美濃(織部)	SX14	3層	19-1	17c前半

## IV. 文化財の調査

### 1. 若林城跡出土「織部皿」

若林城跡出土「織部皿」は、若林城跡第11次発掘調査で出土しており、極めて特徴的な器形文様をもつ皿である。本資料の文化財的価値を明らかにするため、岐阜県可児市の長瀬治義氏の協力を仰ぎながら仙台市文化財課で調査を行った。以下、1. では若林城跡出土「織部皿」の概要、2. では長瀬治義氏の調査報告、3. ではまとめを記載する。

#### (1) 若林城跡出土「織部皿」の概要

##### 1. 若林城跡について

若林城跡は仙台市若林区古城に位置している。

寛永5(1628)年に伊達政宗によって築かれた平城である。周囲を土塁と堀に囲まれ、北西・北東・南西隅、南辺中央に張り出しが設けられている。寛永13(1636)年に政宗が死去すると若林城は遺言に従い廃城となる。御殿建物の一部は仙台城二の丸に移築され、城内は藩の御薬園となり、現在は宮城刑務所となっている。発掘調査では、城の西側にあった表御殿の建物跡や城内を流れていた六郷堀、大型のゴミ穴などが見つまっている。

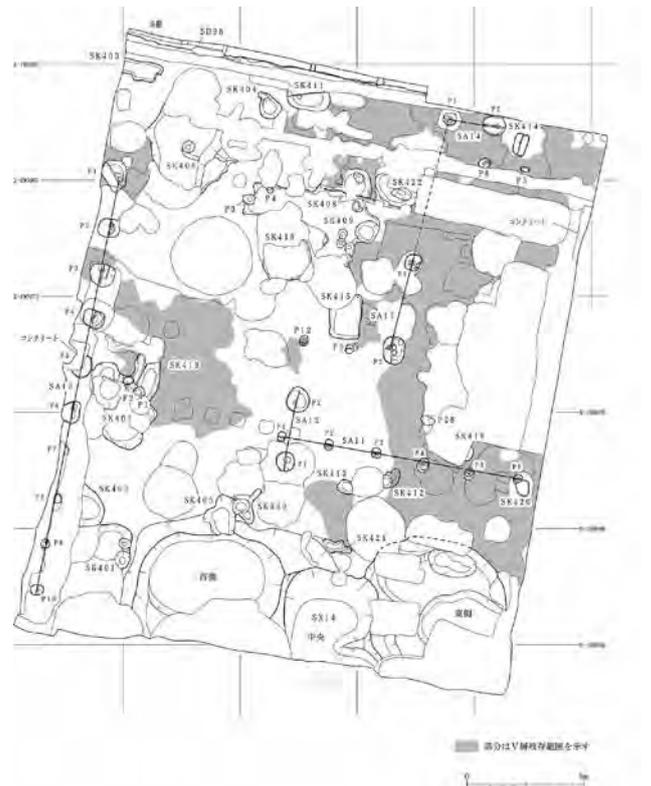


若林城跡周辺の地図

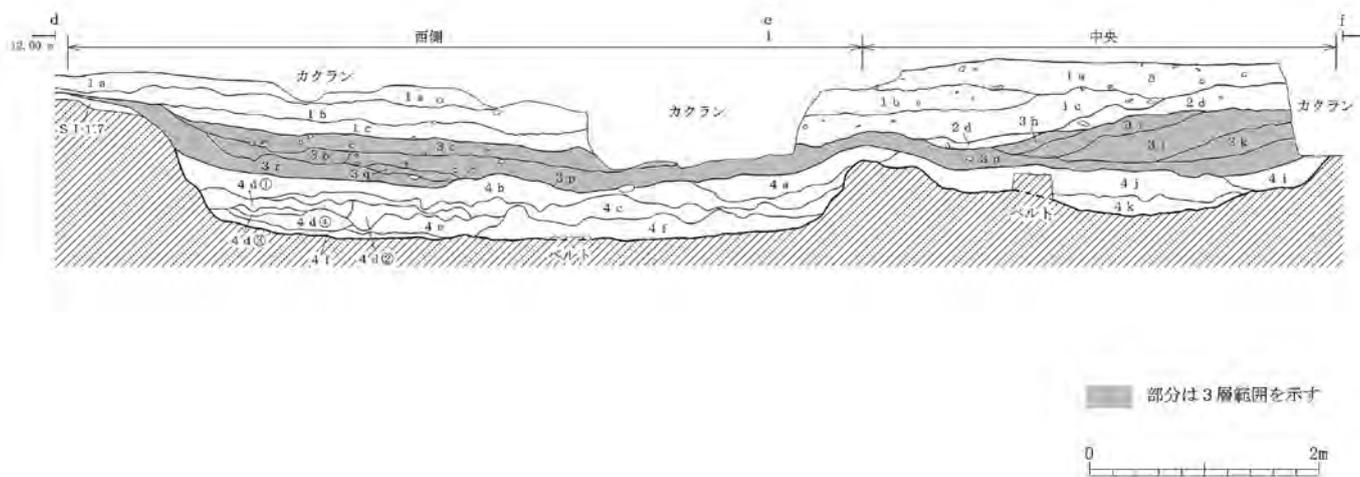
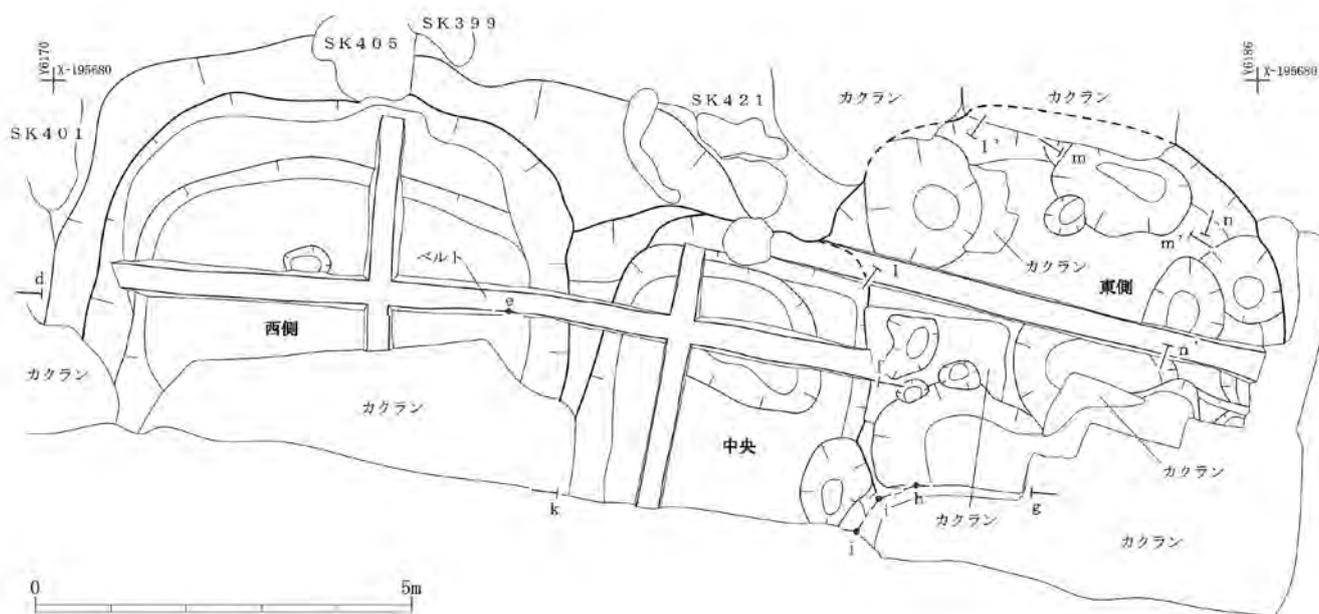
##### 2. 出土遺構・層位

「織部皿」は若林城跡第11次発掘調査で確認されたSX14の3層から出土している。

SX14は若林城跡北東隅の張り出しから検出された。3基の土坑が東から順に連続して掘削されており、当初は土取りを目的として掘削され、土取り後はゴミの廃棄場所として使用されたと考えられている。堆積土は大別4層に分層され、若林城期の遺物は主に3層から出土しており、3層が遺物廃棄層と考えられている。



第11次発掘調査遺構配置図



若林城跡第11次発掘調査SX14 平断面図

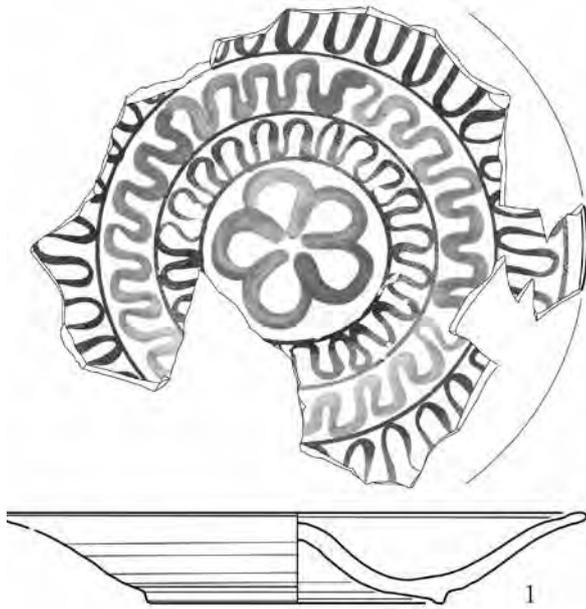
### 3. 特徴

「織部皿」の法量は口径20.9cm, 底径10.6cm, 器高3.3cmである。底部中央がドーム状に盛り上がり, 体部が外反気味になだらかに立ち上がる。口縁部がやや開くため皿とされている。口縁端部と内面はロクロナデが残るが, 体部から底部外面は回転ヘラケズリ調整されている。高台は削り出されており, 見込みと高台内側のそれぞれ3か所に円錐ピンの痕がみられる。釉薬は高台内側まで全体に長石釉が施され, 胎土はやや薄い黄褐色である。文様は底部中央に花卉状の文様が描かれ, 底部から口縁部にかけて黒褐色の圏線が四重に巡り, 圏線の間には黒褐色と赤褐色の波状文が鉄釉と赤楽で描かれている。

17世紀前半に美濃国の弥七田窯(現 岐阜県可児市)で製作されたと考えられている。類例として岐阜県立多治見高等学校所蔵の「志野織部鉢」, 福島県三春町の近世追手門前通遺跡B地点から出土した「織

IV. 文化財の調査

部鉢」，荒川豊蔵資料館収蔵品（「豊1402」，「豊1403」，「豊1408」，「豊1409」，「豊1413」），日本陶磁大系12『織部』で紹介されている「絵織部」がある。



「織部皿」実測図，写真

(2) 仙台市若林城跡出土の「弥七田織部」

1. 弥七田古窯跡の立地

弥七田古窯跡は，岐阜県可見市の東部久々利地区の山間に佇む大萱集落内にあり，集落に面する久々利川右岸の丘陵南斜面に立地している。同じ大萱古窯跡群に属する美濃大窯Ⅴ期（黄瀬戸，瀬戸黒，志野などを焼成）の牟田洞古窯跡や大萱窯下古窯跡とは200～300m離れただけの距離であり，これらはまさに同じ環境の中で息づき生まれ，操業していた古窯である。

この集落をさらに東へ進めば，2km程の間に中古窯跡，峠を越えて大平古窯跡群が，土岐市域へ入ると高根古窯跡，久尻窯ヶ根古窯跡，元屋敷古窯跡などと，桃山期から江戸期にかけての美濃大窯や連房式登窯の古窯跡が多数分布し，人里離れたこの丘陵一帯は正に美濃桃山陶生産のメッカであった。



弥七田古窯跡と周辺の遺跡

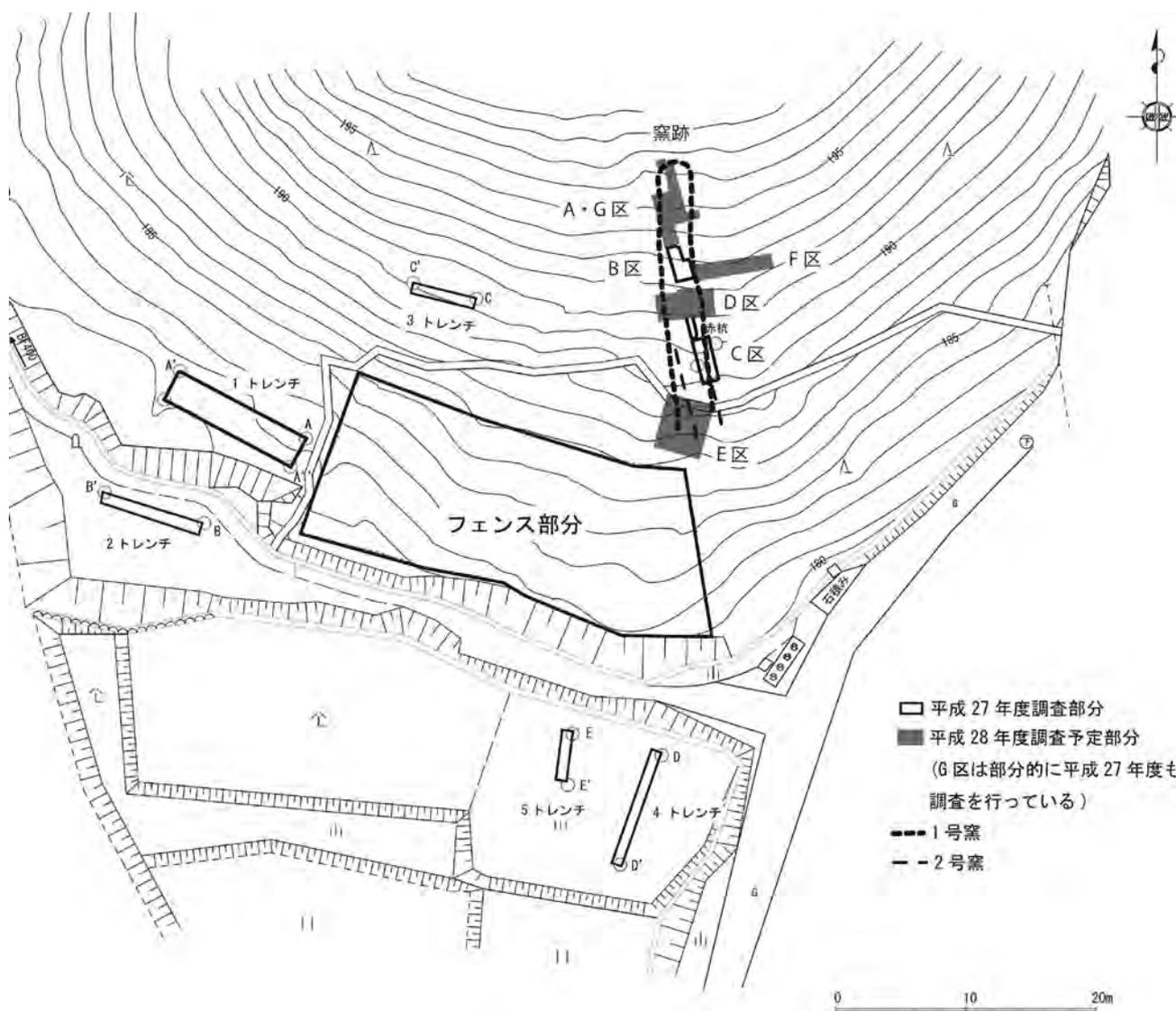
## 2. 弥七田古窯跡の構造と操業時期

弥七田古窯跡では、平成27・28年度（2015・16）の国史跡指定を目指した発掘調査で2基の連房式登窯が確認されている。

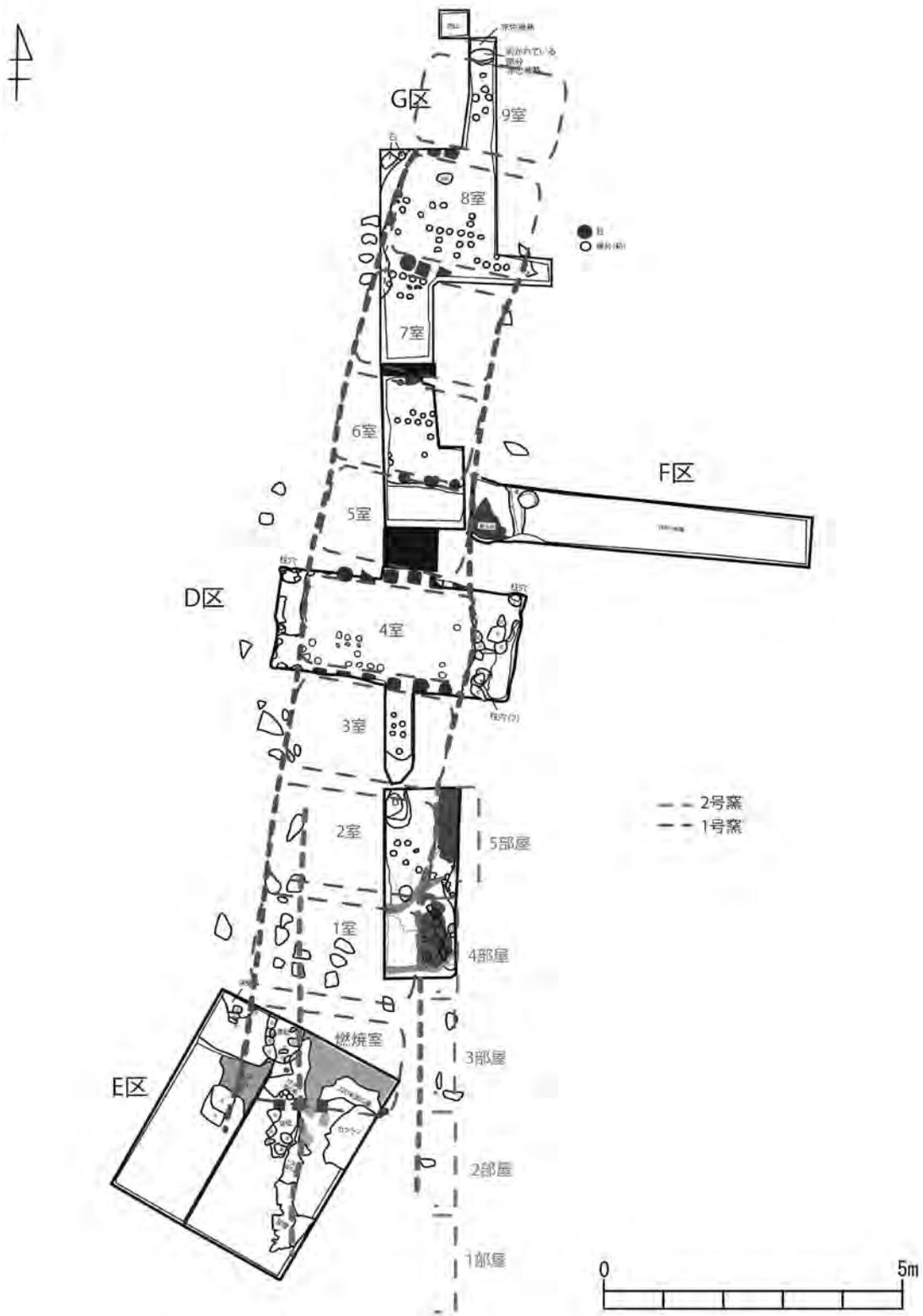
1号窯は、焚口と煙道部は未検出だが、半地下式で窯体推定長約20.6m、燃焼室と9室の焼成室を有する。焼成室は、小分焰柱を持たず分焰を兼ねた天井支柱6・7本によって区切られ、隔壁や狭間構造のない特異な構造である。天目茶碗など碗類の編年観や牟田洞古窯跡や大萱窯下古窯跡と共通する複数の窯記号の使用なども含め、連房式登窯第1小期前半（慶長期後半・1610年頃、藤澤編年）に位置づけ得る。

また、2号窯は、1号窯の廃棄後にやや主軸を変えつつも、その上部に築かれた地上式の連房式登窯である。確認できた窯体は焼成室が5室分、残存長は8.5mであり、有段斜狭間構造と考えられる。窯内の床面に最終焼成品の御深井釉製品が熔着していたことも含め、連房式登窯第1小期後半（寛永期前半・1630年頃、藤澤編年）に位置付けられる。

これらの状況から、大まかに言えば1号窯は織部製品（連房式登窯第1小期前半～後半）を主体に、2号窯は御深井釉製品（連房式登窯第1小期後半）を主体に焼成した窯とみることができる。



弥七田古窯跡平成27・28年度発掘調査トレンチ配置図



弥七田古窯跡平成27・28年度発掘調査全体図

### 3. 弥七田古窯の製品

弥七田古窯は、織部製品を焼いた他の古窯とは一線を画する独特で特徴ある良質な製品が焼成されたことで著名であり、伝世する優品がこれを如実に示している。これらは、「弥七田ブランド」の意味から特に弥七田織部の呼称が与えられてきた。

特に、1号窯で焼成されたとみられる製品には、大窯期から継続する鉄釉や灰釉製品に加え、黄瀬戸の技法の一部を継承した総織部や青織部、瀬戸黒から発展した織部黒や黒織部、志野や鼠志野の技法を引き継ぐ志野織部や鼠志野織部の他、赤織部や鳴海織部、鉄釉灰流しなどの新技法による製品も見られる。さらには美濃伊賀や美濃唐津といった外的な要素も加わり、全体として「織部様式」を構成している。その特徴を以下に掲げる。

- ①特に口縁や高台・脚部の形、意匠が凝っている
- ②器壁の薄さやシャープさが卓越する製品が目立つ
- ③下絵具に鉄錆だけでなく赤楽も使う
- ④鼠志野の技法に見る化粧掛けした鉄錆の搔き落とし技法を継承する
- ⑤多様な絵や文様を繊細で達筆な線で筆描きする
- ⑥長石釉などを全面に浸け掛けするものが多い
- ⑦銅緑釉の上掛けは浸け掛けでなく垂らし掛けする

弥七田織部の優品にみる志向は、「モダン」、「繊細」、「洗練」、「優雅」などの言葉で表現でき、より艶やかに、より多様に、より個性的に、よりスマートに、といった指向性を読みとることができる。この背景には、卓越した陶芸技術による高品質の維持（高級品志向）も読み取ることができよう。ただし、銅緑釉の垂らし掛け技法や黒織部茶碗に見る切紙貼付けによる白抜き技法（マスキング）などについては、大平古窯跡群や久尻窯ヶ根古窯などにおいても見受けられる。

#### 4. 若林城跡出土の織部陶片

若林城跡第11次発掘調査で出土した陶片は、志野織部端反り（上げ底）皿に分類できる。これと同種同形、同文様の種類については伝世品にも知られるが、生産地である美濃においても、昭和前半期に弥七田古窯跡のみにおいて数点が採集されており（荒川豊蔵採集資料、多治見工業高校採集資料）、本窯が生産窯であることに疑いはない。これら同種同形、同文様の採集資料を参考にしつつその製作技法をみとめる。荒川豊蔵資料館が収蔵する同資料のNo.は、「豊1402」、「豊1403」、「豊1408」、「豊1409」、「豊1413」である。

この端反り皿はロクロにより薄手に引き上げられ、口縁部近くは端反りに成形されている。法量は、復元口径が20.9cm、底径10.6cm、器高3.3cmを測る。調整は、底部を回転糸切後、外面胴部以下を回転ヘラケズリし、外面底部をごく浅い削り込み高台（または無高台）とした後に、外面底部から型などで軽く押圧して内面底部の中央をドーム状にふくらみを持たせ、「上げ底」に整形されている。このような「上げ底」の皿は、他の古窯には例を見ない器形である。機能的なものか装飾指向によるものか、或いは両方なのかはわからない。

内面には、鉄錆と赤楽で「大波文」を巡らせた後、全面に長石釉を上掛けする。酸化焰焼成により長石釉はよく溶けて器肌はクリーム色に、下絵の赤楽は鮮やかな朱色に発色している。

焼成においては、円錐ピンや団子トチを用いて重ね焼きされている。窯跡の出土資料（1413）から見ると、熔着痕も含め少なくとも同形品が5個体以上重ね焼きされていることが分かり、同種品がある程度量産されていたようである。胎土は、本窯に通有の緻密な白土である。

若林城跡出土の本資料は、前記「弥七田織部」の特徴である①、②、③、⑤、⑥を備えるものである。

#### 5. 織部製品の流通

消費地における美濃桃山陶の出土は、この地方の近隣や問屋として集積された京の都だけでなく、北海道から九州まで全国各地で知られている。それらの一次的なもの（生産地から問屋へ）や二次的なもの（問屋から消費地へ）を含めた各種織部製品の流通は、これらが茶陶や懐石具自体であるがため、桃

#### IV. 文化財の調査

山期に京や大坂、堺など畿内の都市を中心に流行した茶の湯文化の地方への拡散としてもとらえられる。

その出土地は、東日本だけを例にとってもご当地の仙台城跡を始め、山形県山形市の山形城跡、酒田市の亀ヶ崎城跡や城南一丁目遺跡、福島県会津若松市の城東町遺跡、埼玉県加須市の騎西城跡、神奈川県小田原市の小田原城跡、静岡県静岡市の駿府城跡、長野県松本市の松本城跡や土居尻遺跡、伊勢町遺跡、石川県金沢市の金沢城跡や広坂遺跡、前田氏屋敷跡、福井県福井市の福井城跡などと枚挙にいとまがない。

そのうち「弥七田織部」とわかる資料は、小田原城跡や駿府城跡、松本城跡、金沢城跡、福井城跡などの出土品にも見受けられ、本資料と同種のものは、福島県三春町の三春城下・近世追手門前通遺跡群B地点において出土している。

#### (3) まとめ

若林城跡は寛永5（1628）年に伊達政宗によって築かれた平城であり、この城跡から出土した「織部皿」は17世紀前半に美濃国の弥七田古窯（現 岐阜県可児市）で製作された。弥七田古窯が位置する丘陵一帯は桃山期から江戸期にかけての美濃大窯や連房式登窯の古窯跡が多数分布しており、美濃桃山陶の一大生産地であった。特に弥七田古窯では織部製品を焼いた他の古窯とは一線を画する独特で特徴ある良質な製品が焼成されており、弥七田古窯産の製品は「弥七田織部」と呼ばれた。若林城跡出土「織部皿」についてもその製作技法に「弥七田織部」の特徴がみられるが、器形や文様は弥七田古窯でも他に例を見ない特殊なものである。円錐ピンの熔着痕などから同種のものがある程度量産されたと考えられるが、その類例は岐阜県立多治見高等学校所蔵品、福島県三春町の近世追手門前通遺跡B地点から出土したもの、荒川豊蔵資料館収蔵品、日本陶磁大系12『織部』で紹介されたものと限られている。

#### 参考文献

- 愛知学院大学文学部歴史学科2017『大萱古窯跡群 弥七田古窯跡』第1次発掘調査報告書
- 愛知学院大学文学部歴史学科2018『大萱古窯跡群 弥七田古窯跡』第1・2次発掘調査報告書
- 荒川豊蔵資料館2023『大萱古窯跡群 弥七田古窯跡採集資料（碗・皿類）』収集陶片資料集Ⅲ
- 可児市教育委員会2018『大萱古窯跡群発掘調査報告書Ⅱ』（弥七田古窯跡）可児市埋文調査報告51
- 仙台市教育委員会2011『若林城跡-第11次発掘調査報告書-』仙台市文化財調査報告書第383集
- 土岐市美濃陶磁歴史館2003『織部の流通圏を探る』
- 土岐市美濃陶磁歴史館2005『第17回織部の日特別展 織部様式の成立と展開』図録
- 藤岡了一1989『織部』日本陶磁大系12
- 三春町教育委員会1995『近世追手門通遺跡B地点-発掘調査報告書-』三春町文化財調査報告書22集

## 文化財課職員録（令和6年4月1日現在）

課長 長谷川蔵人

### 管理係

係長 二宮 洋一  
総括主任 大上 雅子  
主任 川后のぞみ  
〃 菅原 美咲  
主事 五十嵐 愛  
〃 沼田 愛  
〃 柴田 義大

### 整備活用係

係長 佐伯 修一  
総括主任 津田 禎之  
主任 佐々木丈夫  
〃 佐竹 直人  
〃 狩野 佑介  
主事 澤目 雄大  
〃 妹尾 一樹  
〃 山口 沙織

### 調査調整係

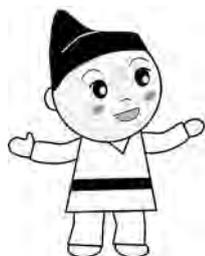
係長 及川 謙作  
主任 大江美智代  
〃 小野 洋平  
主事 相澤 宏樹  
〃 佐藤 恒介  
〃 須貝 慎吾  
〃 早川 太陽  
〃 石倉 蓮  
〃 吉田 大  
〃 小岩 優日

### 調査指導係

係長 鈴木 隆  
主任 庄子 裕美  
〃 高橋 純平  
主事 三浦 一樹

### 仙台城史跡調査室

室長 関根 章義  
調査指導係長 鈴木 亨  
主事 大友 翔平  
〃 柳澤 楓  
〃 木村 恒  
〃 富士原真愛



仙台市文化財調査報告書第528集

## 文化財年報 46

令和6年度

令和7年9月

編集・発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区上杉1丁目5-12  
仙台市教育委員会文化財課

印刷 社会福祉法人共生福祉会 萩の郷福祉工場

仙台市太白区鉤取御堂平38  
TEL 022-244-0117